

教員養成機関の学生を対象とした ESD 推進のための教材開発

-ナッジ理論の視点を取り入れた手洗いに関する啓発活動を題材として-

佐々木 緩乃 (琉球大学), 杉田 映理 (大阪大学), 友川 幸 (信州大学), 上野 真理恵 (信州大学)

キーワード：ESD, 教員養成機関, 手洗い, 啓発活動, ナッジ理論

1. 背景

Education for Sustainable Development for 2030 では、持続可能な社会のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD) 推進のための優先行動分野の1つとして、「教育人材の育成」が挙げられ、人材育成の重要性が指摘されている (ユネスコ, 2019)。学校は、ESD 推進の重要な場所の一つであり、学校での ESD 普及のためには、現職教員および教員養成機関の学生に対する ESD 推進の必要がある。先行研究では、今後の ESD 推進の一方策として、教員養成機関の学生に対する ESD 教材の学習体験の重要性が指摘されている (渡邊, 2017)。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大は、持続可能な社会の実現を脅かす脅威となっている。感染症対策を推進するためには、水衛生の問題の改善や手洗いの推奨といった人間の健康行動の変容が不可欠である。これまでの研究では、健康行動の変容を効果的に支援する方法として、行動経済学の「ナッジ」の活用が着目されており、学齢期の子どもの手洗い行動の改善に、「ナッジ理論」の導入の効果が報告されている (Dreibelbis et al, 2016)。ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (文部科学省, 2021) を培うために、生徒にとって、楽しく、考察のしやすいナッジ理論の導入は有効だと考えられる。しかしながら、これまで、教員養成機関の学生を対象としたナッジ理論を用いた ESD 教材の開発事例はなく、手洗いに関する啓発活動を題材とした ESD 教材の開発事例も報告されていない。

2. 目的

本研究では、教員養成機関の学生におけるナッジ理論に関する知識や認識を明らかにし、学生を対象としたナッジ理論を取り入れた手洗いに関する啓発活動を題材に ESD 推進のための教材の開発に資することを目的とした。

3. 方法

地方国立大学の教育学部で保健体育教員免許の取得を目指す1年生 (21名) を対象に Google フォームを使用した無記名自記式の質問紙調査を行った。調査では、①ナッジ理論に関する知識、②学校現場での保健教育において、手洗いに関する啓発方法について指導する必要性、③同教育を指導する自信について、4件法で回答を得た。また、学校現場で手洗いを普及するために重要なことについて自由記述で回答を得た。自由記述による回答は、それぞれコード化し、類似しているコードからカテゴリーを生成した。授業の開発においては、国際保健、保健教育の専門家、現職の教員などによる検討会を複数回開催し、指

導の内容や方法について検討した。

4. 結果と考察

1) 対象者

回答に不備のなかった15名を分析の対象とした。

2) ナッジ理論に関する知識

全員が「ナッジ理論に関して何も知らない」と回答した。

3) 手洗いに関する啓発活動についての指導の必要性

11名 (73%) が「かなりそう思う」、4名 (27%) が「概ねそう思う」と回答した。

4) 手洗いに関する啓発活動についての指導の自信

2名 (13%) が「まったくそう思わない」、7名 (47%) が「あまりそう思わない」、6名 (40%) が「概ねそう思う」と回答した。

5) 学校現場で手洗いを普及するために重要なこと

回答の多い順に、「手洗いの重要性や意義の教育 (73%)」、「手洗いの効果の可視化 (40%)」、「手洗いを楽しく行う工夫 (33%)」、「手洗い週間の実施 (7%)」のカテゴリーが挙げられた。挙げられた回答の中で、「手洗いの効果の可視化」や「手洗いを楽しく行う工夫」等には、ナッジ理論を活用した活動を取りあげることが効果的であると示唆された。

6) 開発した授業内容

水衛生をテーマとした ESD 教材における第4時として、ナッジ理論の視点を取り入れた手洗いに関する啓発活動を企画する授業を開発した。授業内容は、①ナッジ理論の紹介、②ナッジの実践例の紹介、③グループワークによる手洗いに関する啓発活動の立案、とした。本教材では、ユネスコが規定している ESD の視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度のうち、「未来像を予測して計画を立てる力」、「多面的・総合的に考える力」、「コミュニケーションを行う力」、「他者と協力する態度」を特に重点的に育成することを目的とした学習活動を導入した。

5. 結論

調査の結果、調査対象となった学生は、ナッジ理論に関する知識がないこと、また、すべての学生が手洗いに関する啓発活動について指導が必要と思っている一方で、半数以上の学生が、手洗いに関する啓発活動の方法について指導する自信がないと考えていることが明らかになった。また、ナッジ理論を活用して「手洗いの効果の可視化」や「手洗いを楽しく行う工夫」を手洗いの啓発活動に導入させることが効果的であることが示唆された。今後の課題として、開発した授業を実践し、更なる授業の内容及び指導法の改善を検討する必要がある。